

## “了<sub>2</sub>”について

武村朝吉

### 要旨

本稿では、従来の“了<sub>2</sub>”についての定義の矛盾と、文構造の重層性を検証し、仮説1を提示した。即ち、アスペクトマーカー“了<sub>2</sub>”は“了<sub>1</sub>”を内包し、特定の時点に参照時を置いて眼前に展開する「新事態」を参照時と関連づけて観察・肯定するものであり、「新事態」の出現は“了<sub>2</sub>”を用いる前提に過ぎない。また、“了<sub>2</sub>”を伴うパーフェクトと、過去テンスあるいは通常のパーフェクトとの差異を検証し、“了<sub>2</sub>”を伴うパーフェクトが、柔軟な時間空間の移動と、直接的に「新事態」を観察する捉え方によって、臨場感の高い中国語の特徴を実現していることを、仮説2として提示した。

キーワード：中国語文法，“了<sub>2</sub>”，アスペクト

§1.0. 現代中国の標準語である“普通話”（以下「中国語」）の虚詞“了”（以下「了」）は、『馬氏文通』から百余年を経てなお多くの研究者を悩ませ続けている。

“了”研究においては当初、動詞の後の“了”（以下「了<sub>1</sub>」）、動詞・形容詞の後で且つ文末の“了”（以下「了<sub>1+2</sub>」）、そして文末の“了”（以下「了<sub>2</sub>」）の三種に分けて扱うのが主流であった。当時、“了<sub>2</sub>”に関しては、「完了」を表すとされた“了<sub>1</sub>”と別けて、語気助詞として扱うのが常であった。しかし、1990年代から影響力を持つようになった“実現説”，そして近年の“了”のアスペクト機能に加えモダリティー機能にも注目する研究（以下「モダリティー説」）においては、個々の“了”についての解釈をつけながらも、三種の“了”を統合的に見る方向へと進んでいる。積極的且つ果敢に提示された新たな学説は従来の学説の不足部分に対し重要な問題提起を行ったし、新学説の是非を巡って展開された多くの研究も含め、“了”に関する議論を深めることに大いに貢献した。しかし管見の限り、それら三学説が“了”体系の全容を説明し切っているとは必ずしも思えない。

“了”が難解である所以はどこにあるのか。そもそも同形態の複数種の“了”が存在すること自体、通常の言語学の常識を超えている。時に一文中に複数個の“了”が現れ、時に一個の“了”になり、時に姿を見せなくなる、その神出鬼没ぶりがまず研究者を悩ませる。また、それら“了”の文法的な働き（以下「働き」）

を捉えようとする、母語話者の語感に照らしても、時に限りなく近似したものとして、時に違ったものとして感じられる、その捉え難さがまた研究者を悩ませる。しかし、同形態の複数種の“了”が厳然たる事実として存在し、時に一文中に複数個の“了”が共起することにも文法上の存在意義があるはずであり、同義でない複数種の“了”が同形態をとることにも理由があるはずである。なぜ働きの異なる複数種の“了”が同形態を取り得るのか、なぜ同形態の“了”が違う働きを為し得るのか、その根源的な原因を解き明かすことこそが、“了”体系の全容解明への扉を開ける鍵となるのではないか。誤解を恐れず“了”の研究史を大雑把に概括させていただくならば、“完了説”も“実現説”も“モダリティー説”も未だその扉を開けていない。更に言えば、三学説の“了”を観察する視点にも解釈を超えた共通点が存在している。即ち、“了”を複数種に分類しようとする“完了説”も、一つに統合しようとする“実現説”と“モダリティー説”も、同様な位置にいくつかの視点を据えて“了”を観察しているという共通点である。

筆者は、複雑に絡み合った“了”体系を解く鍵は“了<sub>2</sub>”にあると考えている。思い切って後ろに退いて、“了”を観察する視点を据える位置とその用い方を変えてみると、複数種の“了”を含む中国語の文構造の見え方が様相を一変させる。文構造自体が重層的に見えてくると同時に、文構造に内在する時間空間の移動のし方もまた重層的に感じられるのである。本稿に

おいては、“了”体系の全容解明への扉を開くべく、“了”を含む文構造の重層性と、“了”に内在する時間空間の重層性、これら二つの中国語の重層性についての仮説を提示する。

### §1.1. 先行研究に見る“了<sub>2</sub>”についての定義<sup>1</sup>

#### 1. “完了説”の“了<sub>2</sub>”の定義

##### (1) 黎锦熙(1924)

表語气的完結。可不问句子里所述说的事情完結了没有，乃至实现了没有。(語気の完結を表す。文中で叙述した出来事の完了そして実現の有無は問わなくてもよい。)

##### (2) 王力(1943・1944)

決定语气。決定语气是用极坚决语气，陈说一种觉察、決定或判断。(決定の語気。決定の語気は極めて堅い語気を用いて、ある種の気付いたこと、決定あるいは判断を述べるものである。)

##### (3) 呂叔湘(1980)

“了<sub>2</sub>”用在句末，主要肯定事态出现了变化，有成句的作用。(“了<sub>2</sub>”は文末に用いられ、主に事態に変化が現れたことを肯定する。文終止の働きがある。)

##### (4) 朱德熙(1982)

语气助词“了”表示新情况的出现。(語気助詞“了”は新しい状況の出現を表す。)

#### 2. “実現説”の“了<sub>2</sub>”の定義

##### (1) 石毓智(1992)

我们认为，“了<sub>1</sub>”和“了<sub>2</sub>”实质上是同一个东西在不同的法位上的语法变体，两者的使用条件是一致的。”(我々は，“了<sub>1</sub>”と“了<sub>2</sub>”は実質的に同一のもので、異なった文法的位置における変異体であると考え。二者の使用条件は一致したものである。)

##### (2) 刘一之(1995)

无论是句中“了”还是句末“了”，都有一个共同的语法意义：“某种情况已成为事实”，所以我们把它看成是一个“了”，不再分“了<sub>1</sub>”和“了<sub>2</sub>”。(文中の“了”であるか文末の“了”であるかを問わず、「ある種の状況が既に事実となった」という共通した文法的意味を有する。従って、我々はそれらを同一の“了”と見な

し、再び“了<sub>1</sub>”と“了<sub>2</sub>”を分けることはしない。)

##### (3) 刘月华, 潘文娛, 故韦华(2001)

它与动态助词“了”具有同样的语法意义，即表示动作状态的实现。表示肯定的语气，有成句、篇章的功能。(それは動態助詞“了”と同様な文法的意味を有する。即ち動作・状態の実現を表す。肯定の語気を表す。文や章節を終止する働きがある。)

#### 3. “モダリティー説”の“了<sub>2</sub>”の定義

##### (1) 劉綺紋(2006)

“了<sub>1</sub>”も“了<sub>2</sub>”も(また“了<sub>1+2</sub>”も)なく、いずれも“了”の1つのマーカーであり、いずれの“了”が使用される場合も同一の操作が働いていると考えれば，“了”の位置にかかわらず、一貫した説明を与えることが可能となるのである。

上掲の三学説の“了<sub>2</sub>”についての定義を概括すると，“完了説”においては、初期の語気助詞としての捉え方を継承しつつも、80年代に至って、呂叔湘(1980)「事態に変化が現れたことを肯定する」、朱德熙(1982)「新しい状況の出現を表す」のように、“了<sub>2</sub>”の具体的な働きに言及する定義へと変化し、それ以後はほぼこれら両者の定義が踏襲されている。

一方，“実現説”と“モダリティー説”においては，“了<sub>1</sub>”と“了<sub>2</sub>”を統合的に一つの“了”と見なしている。

### §2.0. “了”を含む構造の重層性について

筆者は嘗て北京師範大学で“了”をテーマに修士論文を執筆し，“了<sub>2</sub>”の働きを以下のように定義していた。

“了<sub>2</sub>”の働きは、特定の時点に立って新しい状態を肯定するものである。“了<sub>2</sub>”は「完了」の意味も「変化」の意味を表さず，“完了説”が言うところの状態の「変化」あるいは出来事の「完了」は“了<sub>2</sub>”を用いる前提に過ぎない。

本稿では、上掲の“了<sub>2</sub>”に関する定義に、筆者の近年の研究成果を合わせ若干の修正を加えた上で，“了”体系を解明するための仮説として提示する。

§2.1. パーフェクト<sup>ii</sup>の概念

中国語文法学界に在っては、中国語にはテンスはなくアスペクトのみが存在するという考え方が大方の常識となっている。しかし、“モダリティー説”を除いて、どのような基準を以って如何なる種類のアスペクトとして捉えているのか、アスペクトの定義について深く掘り下げている研究は少ない。

本稿では、劉綺紋 (2006) が引いているパーフェクトについての定義——Comrie (1976: 52) 「(参照時における) 状態を、それに先行する事態と関係づけている」、Mac л oB (1984) や工藤 (1995) 「先行事態が後続の参照時の状態・属性に関与しており、参照時において効力を持っている」、Reichenbach (1947) ・Smith<sup>1997</sup> 「単純過去と現在パーフェクトとの相違点は、参照時の位置が異なる、という点にある。単純過去の場合、参照時を過去の事態時に置いてその過去の事態を捉える。それに対し、現在パーフェクトの場合、参照時を発話時である現在に置いてその過去の事態を捉える。」——を“了<sub>2</sub>”の問題を考える基準とする。

まず上記基準によって、パーフェクトとテンスを模式化し以下に示しておく。

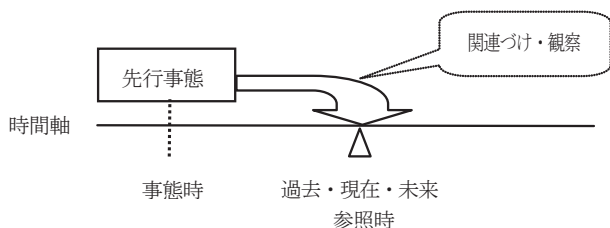


図1. パーフェクトの模式図

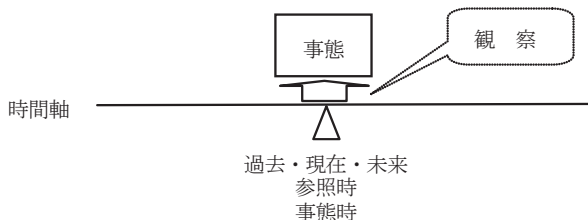


図2. テンスの模式図

§2.2. “了<sub>2</sub>”が担うアスペクトマーカとしての働き

朱德熙 (1982) は2つの事例を対照して“了<sub>2</sub>”について以下のように説明している。

①我在这儿住了五年。(私はここに5年間住

んだ。) <sup>iii</sup>

②我在这儿住了五年了。(私はここに5年間住んでいる。)

①の場合は出来事を“現在”と関連付けていない。②のように語気助詞“了”を加えると、「現在に至るまで既に5年間住んでいる」という意味になる。

上記説明の意味するところは、①ではパーフェクトが成立していないのに対し、②では文末の“了”が加わったことで、「5年間住んだ」という事態が参照時(現在)と関連付けられてパーフェクトが成立し、その事態が現在に至る「5年間住んでいる」となっている、と理解できる。

次に呂叔湘 (1980) を見ると、同種構造の文について以下のように説明している。

動/形+了<sub>1</sub>+数量+了<sub>2</sub> 動詞(尤其是結束性動詞)后面的‘了<sub>1</sub>’可以省略。

[動/形+了<sub>1</sub>+数量+了<sub>2</sub> 動詞(特に完結性の動詞)の後の‘了<sub>1</sub>’は省略できる。]

③我在北京已经住 [~] 半个月~。

(私は北京で既に半月住んでいる。)

④已经念 [~] 好几遍~。

(既に何度も読んでいる。)

上記説明から、完結性の動詞の場合、④のように“了<sub>1</sub>”不在にも関わらず、“了<sub>2</sub>”の働きによってパーフェクトを成立させ得ることが伺える。

両者の説明内容をまとめると、パーフェクトを成立させるために不可欠な「先行事態を参照時と関連付ける働き」は“了<sub>2</sub>”によって担われ、動詞の種類によっては、その働きは“了<sub>1</sub>”を欠いた状況下でも可能であることが分かる。

§2.3. “了<sub>1</sub>”と“了<sub>2</sub>”が抱える論理的矛盾を回避する方策 (“了<sub>2</sub>”の定義の再考)

“実現説”の刘月华, 潘文娣, 故韦华 (2001) は, [名詞+“了<sub>2</sub>”] の事例を挙げ, 以下のように説明している。

⑤十七八了, 大姑娘了, 该董事了。 <sup>iv</sup>

⑥西单了, 有下车的请往里走。

説明要約: 年齢も, バスが通過する停留所も, 規則的に入れ替わり変化するものである。“了<sub>2</sub>”はこのような性質を持った名

詞の後に用いることが可能で、「状態の実現」を表す。

母語話者は⑤⑥のような〔名詞+“了<sub>2</sub>”〕に「変化」や「新しい状況の出現」を感じるというが、一体何がそのような感覚を与えるのだろうか。一般論として、名詞のみの働きによって「実現」が表されるとは考えられない。「“了<sub>2</sub>”」や「名詞+“了<sub>2</sub>”」に起因する可能性についても、従来の“了<sub>2</sub>”の定義では説明が難しい。結局のところ、「名詞+“了<sub>2</sub>”」で「変化」を感じさせる原因を探り出すためには、“了<sub>2</sub>”についての新たな定義が必要となってくる。

この種の〔名詞+“了<sub>2</sub>”〕の問題については、“完了説”の多くの先行研究も、“実現説”同様、それが“了<sub>2</sub>”の働き（「新しい状況の出現」）によるものであると解釈している。

しかし、そのような解釈は論理的矛盾を秘めている。⑤⑥に“了<sub>1</sub>”が現れないことは、“了<sub>2</sub>”自体が、「変化」や「新しい状況の出現」、あるいはその契機となる「動作・行為の‘開始’、‘完了’」または「状態の‘変化’」を表すことを意味する。つまり、そのように“了<sub>2</sub>”の働きを捉えると、“実現説”や“完了説”が“了<sub>1</sub>”の定義としてきた「実現」や「完了」と重複し、同じ働きをする二つの“了”が共起するという論理的矛盾が起こるのである。論理的矛盾は、それを解消しようと働く必然的反作用を免れず、二つの“了”はどちらか一方の“了”に収束される方向に向かうはずである。しかし、“了”の分布状況が示す実情は、省略可能な場合を除いて、そのようにはなっていない。実情を踏まえるのであれば、“了<sub>2</sub>”の働きは“了<sub>1</sub>”と分けて定義されなければならない。実際“完了説”は定義を分けたのであるが、そこでまた、異なる定義を持つ両者が同形態を取っているという論理的矛盾が起こってしまった。

統合的に定義しても矛盾、分けても矛盾。そのような論理的矛盾の袋小路を脱する唯一の方策は、論理的矛盾を突きつめたところに、新たな論理——「“了”を、似て非なる二つの“了”から構成される複合体と見なす」——を得ること以外には考え難い。筆者はその捉え方の要諦を、③④ (§2.2) のような“了<sub>1</sub>”不在の状況を説明する必要条件を満たす、「“了<sub>2</sub>”は“了<sub>1</sub>”を内包する」にあると考え

る。このように解釈することで、“了<sub>2</sub>”自体は必ずしも「変化」や「新しい状況の出現」を表さず、それらは“了<sub>2</sub>”を用いるための前提に過ぎないということも明らかになってくる。

§2.4. “了<sub>2</sub>”は上位層に、“了<sub>1</sub>”は下位層に存在し、上位層は下位層を内包している

§2.2. では「“了<sub>1</sub>”と“了<sub>2</sub>”が共起する事例」と「“了<sub>1</sub>”が省略可能な事例」を見てきた。それら事例に、多々存在する「“了<sub>1</sub>”単独で文終止する事例」と「“了<sub>1</sub>”も“了<sub>2</sub>”も現れない事例」を併せると、“了<sub>1</sub>”と“了<sub>2</sub>”の分布パターンとして4つの形態が考えられる。略式標記すると以下のようなになる。

- a) [ ~ “了<sub>1</sub>” ~ ] .
- b) [ ~ ( “了<sub>1</sub>” ) ~ ] .
- c) [ [ ~ “了<sub>1</sub>” ~ ] ~ “了<sub>2</sub>” ] .
- d) [ [ ~ ( “了<sub>1</sub>” ) ~ ] ~ “了<sub>2</sub>” ] .

視覚的に容易に確認できるように、“了<sub>1</sub>”を有する [ ] は下位層、“了<sub>2</sub>”を有する [ ] は上位層として存在し、上位層が下位層を内包している。このような構造上の関係性から、以下のことが推測できるのではないだろうか。

- i. a) の単層構造の場合は“了<sub>1</sub>”単独で働き、c) d) の二層構造の場合は“了<sub>1</sub>”と“了<sub>2</sub>”が相互補完する複合体として働く。
- ii. c) d) の場合、“了<sub>2</sub>”によって参照時と関連付けられる「新事態」を出現させる働きは、多くの場合、下位層 [ ] の部分によって完結される。同時に、[ ] は中核に“了<sub>1</sub>”を持つことから、「新事態」を出現させる「動作・行為の‘開始’または‘終結’」、あるいは「状況の‘変化’」は、“了<sub>1</sub>”によって担われる。
- iii. “了<sub>1</sub>”と“了<sub>2</sub>”の両者は、それぞれが異なった役割を担いつつ、構造上の不可分の関係性から、相互補完の関係を以ってパーフェクトを構成する複合体である。つまり、“了<sub>1</sub>”による「新事態」の出現と、“了<sub>2</sub>”による「新事態」と参照時との関連付け、それら両者の働きが合わされることによってパーフェクト構文が形成される。
- iv. “了<sub>2</sub>”はその使用条件として、構造的に“了<sub>1</sub>”を内包することから、“了<sub>1</sub>”が



現れる（省略可能な場合も含む）場合は、上記 ii を要求する。一方、“了<sub>1</sub>”が現れない場合は、上記 ii がもたらす結果に近似する事態を要求する。つまり、“了<sub>1</sub>”が現れない場合は、参照時以前に既に出現している「先行事態」を「新事態」として認識することを要求する、逆説的に言えば、“了<sub>2</sub>”を伴うことによってその先行事態は「新事態」として認識されるのであるから、それは間接的に“了<sub>2</sub>”の使用条件である上記 ii が関与しているということになる。結局、“了<sub>2</sub>”はその使用条件として、潜在的・顕在的を問わず、直接的あるいは間接的に、全て“了<sub>1</sub>”を内包したものであるということになる。

上記推論を判断基準とすると、これまで議論してきた事例に対し以下のような解釈ができる。

事例③④（§2.2.）の場合、「完了」の意味は“了<sub>2</sub>”に内包された省略可能な“了<sub>1</sub>”の働きによる。

事例⑤⑥（§2.3.）のような、母語話者が「変化」や「新しい状況の出現」を感じるという〔名詞＋“了<sub>2</sub>”〕の事例については、次のように解釈できる。⑤⑥の「十七八」「大姑娘」「西单」は、“了<sub>2</sub>”がその使用条件として要求する、そうでなかった状態（以下「旧事態」）から既に変化した「新事態」である。「新事態」は、「旧事態」からの変化によって出現した事態である以上、「旧事態」から「新事態」への変化性を包含している。結局のところ、母語話者が感じる「変化」や「新しい状況の出現」は、“了<sub>2</sub>”がその使用条件として「新事態」を要求する点と、「新事態」が変化性を包含している点、これら二点が「新事態」を認知するプロセスに在って、認知の可塑的反作用として働き、副次的に生起させる感覚だと考えられる。

以上の考察をまとめ、以下に仮説1を提示する。

仮説1：“了<sub>2</sub>”は「新事態」を参照時と関連付けて観察・肯定するアスペクトマーカである。構造的に言えば、上位層にある“了<sub>2</sub>”は下

位層の“了<sub>1</sub>”を内包している。このような構造的な理由に起因する“了<sub>2</sub>”の使用条件のため、「新事態」は“了<sub>1</sub>”よって出現したものか、参照時以前の「先行事態」が「新事態」として認識されるものである。故に、“了<sub>2</sub>”の働きは、特定の時点に参照時を置いて眼前に展開する「新事態」を参照時と関連付けて観察・肯定するものであり、「新事態」を出現させる事象の変化はそれを用いる前提に過ぎない。

### §3.1. “了<sub>2</sub>”が表す不自然なパーフェクト

刘勛宁（2002）は以下のような事例を挙げて“了<sub>2</sub>”が過去テンスを表すマーカであることを立証しようと試みている。

⑦我昨天去城里了。（私は昨日町に行った。）

⑧我去年回老家了。（私は去年実家に帰った。）

⑨我25年前就到山东了。（私は25年前に山東に行っている。）

⑩25万年前，周口店猿人就知道用火了。

（25万年前，周口店の猿人は火を使うことを知っていた。）

上掲の事例は全て“了<sub>2</sub>”を伴い過去の出来事に言及している点で共通するが、良く見みると、それら事例の中に現れる事態には大きな差異があることが分かる。

まず、（私が）過去の出来事を回想している⑦⑧⑨からは、「私はここにいる」という状態が発話時（現在）に至る、事態の継続性は感じられない。次に、⑦除いて⑧⑨⑩の表す出来事は発話時（現在）からの時間的な経過幅が大きく、現在（発話時）に参照時を置いて、先行事態を捉えていると見なすには無理があるように感じられる。先行事態の継続性は経過した時間幅の大きさに反比例して漠然としたものになってゆくはずであり、そのような漠然とした殆ど直接的な影響が感じられない事態を現在パーフェクトとして捉えることができるとは思えないからである。また、⑦⑧⑨⑩からは、それら事例中の時間副詞が示す過去の時点に参照時を置いて、それに先行する事態を捉えているとも感じられない。

以上の考察から、それら事例が現在・過去パーフェクトである可能性は極めて低いことが分かる。

このように考えると、これら事例を過去テ

ンスの範疇に属するものであるとする刘勛宁 (2002) の見解は説得力のあるものとして感じられる。しかし、過去テンスの表す情報の性質と文構造の関係について考えてみると事情は変わってくる。過去テンスで表される情報は一般的に「何時いつ ～が ～した。」のような極めて単純な性質の情報のはずである。果たして、そのような単純な性質の情報を表すために、“了<sub>2</sub>”を伴った重層構造に頼る必要があるのか。自然現象の摂理からすれば、「単純なことは単純なもので」がより自然なはずである。過去テンスが単純な構造に頼るとしたら、刘勳宁 (2002) が指摘する過去テンスの働きを担っている“了”は、むしろ“了<sub>1</sub>”を有する下位層に求めた方がその存在の可能性がより高くなるように思われる。

§ 3.2. “了<sub>2</sub>”に内在する時間空間の重層性

ここで、§ 2の仮説1も加え、再度事例⑦⑧⑨⑩が過去テンス、パーフェクトのどちらの範疇に属するのか、検証してみたいと思う。

§ 3.2. で見てきたように、⑦～⑩の事例は現在・過去パーフェクトの範疇に属する可能性も、過去テンスである可能性も低い。しかし一方で、これら事例が“了<sub>2</sub>”を伴っていることからすると、仮説1で示したパーフェクトである可能性は高い。もし仮にこれら事例が仮説1で示したパーフェクトであるとするならば、“了<sub>2</sub>”を伴ったパーフェクトは、その多くが、通常の現在・過去パーフェクトとは異なったものであることになる。以下に、仮説2を提示する。

仮説2. “了<sub>2</sub>”を伴ったパーフェクトは、その多くが、発話時(過去・現在・未来)に参照時を置いて、参照時において眼前で展開される「新事態」を確認・肯定する捉え方である。

上掲仮説2に示したパーフェクトは、通常のパーフェクトと比べ、捉える対象である事態を参照時と関連づけるという点で共通するが、眼前の「新事態」を確認・肯定するものであり、より直接的で、より臨場感の高い捉え方であると言える(図1・3・4参照)。この種のパーフェクトにおいて“了<sub>2</sub>”が捉える「新事態」は、常に「旧事態」から変化した「新事態」、換言すれば、「旧事態」とは対照的な「新事態」であることを基盤とする点で、事態

の完結を単純に捉えるテンスとも異なっている(図2・3・4参照)。その「新事態」は、参照時以前に出現したものの参照時において正に出現したものまで、観察者によって「新事態」と認識されるものであり、主観性と柔軟性に富んだ対象であると考えられる。(図3・4参照)

この種の“了<sub>2</sub>”を伴ったパーフェクトは、発話者がまるで発話時(立ち位置)を忘れてしまったかのように、参照時を現在から過去にも未来にも瞬間的に移動させ、移動先に立ち居地を据えて、そこで展開される「新事態」を直接的に観察する。このような柔軟な時間空間の移動と、眼前に展開される「新事態」を直接的に捉えること、その二点こそが、中国語に突出した柔軟性と高い臨場感を与えている二大要因であると考えられる。翻って言えば、それら二大要因こそが、「名詞(「新事態」) + “了<sub>2</sub>”」構造を可能としているものであるとも言える。

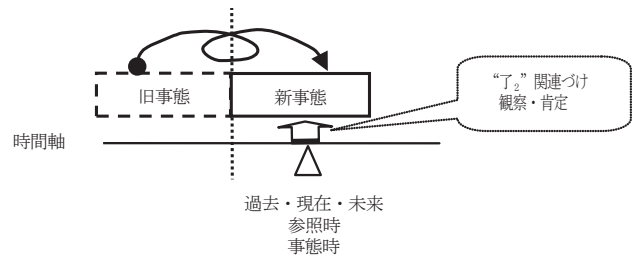


図3. “了<sub>2</sub>”を伴うパーフェクトの模式図1

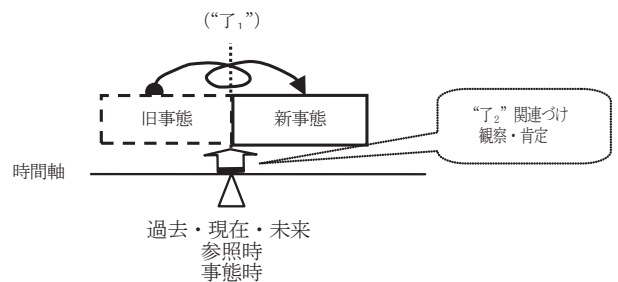


図4. “了<sub>2</sub>”を伴うパーフェクトの模式図2

§ 4. 最後に

本稿では専ら“了<sub>2</sub>”の定義と“了<sub>2</sub>”を伴うパーフェクト構文の働きに関する基本理論について述べてきた。本稿で提示したいくつかの基本理論が、実際の中国語のテキスト解釈にどのように活かされるのか、あるいはそれら基本理論からどのような次の理論が見出されてくるの

か、提示しなければならない課題は多い。それら課題についても、積極的に研究活動を推し進め、順次発表していきたいと思う。

- 
- i 日本語訳は全て筆者による。
  - ii パーフェクトの定義については劉綺紋 (2006) 『中国語のアスペクトとモダリティー』に詳しい。本稿はその表現に倣った。
  - iii 以下事例の日本語訳は全て筆者による。
  - iv 以下事例の下線は全て筆者による。

#### 参考文献

1. 黎锦熙 (1924) 《新著国语文法》商务印书馆, p. 229
2. 王力 (1943·1944) 《中国现代语法》年商务印书馆, p. 161
3. 吕叔湘 (1980) 《现代汉语八百词》商务印书馆, pp. 314-318
4. 朱德熙 (1982) 《语法讲义》商务印书馆, p. 209
5. 石毓智 (1992) 〈论现代汉语的“体”范畴〉《中国社会科学》第6期, pp. 94-111
6. 刘一之 (1995) 「“了”的语法意义」『中国語学』242号, pp. 56-63
7. 刘月华, 潘文娉, 故韦华 (2001) 《实用现代汉语语法》商务印书馆, p. 382
8. 刘勋宁 (2002) 〈现代汉语句尾“了”的语法意义及其解说〉《世界汉语教学》第3期, pp. 70-79
9. 劉綺紋 (2006) 『中国語のアスペクトとモダリティー』, p. 29, p. 71
10. 武村朝吉 (2001) 〈从两个视角谈“了”的问题以及汉语“了”与相对应日语的对比研究〉北京师范大学研究生院, p. 10

#### 注

11. 《 》 : 中国語書籍・学会誌, 〈 〉 : 中国の論文
12. 『 』 : 日本の書籍, 「 」 : 日本の論文

## About Chine “le 2”

Tomoyoshi Takemura

### Abstract

First we investigated the previous definition of "le2" and found that it includes some logical contradiction; that "le" consists of double layers of meaning, which possesses "le2" in the dominant layer and "le1" in its subordinate layer. Consequently, we developed hypothesis №1, which indicates that the grammatical function of "le2" is to observe or signal a new situation shown in immediateness, but does not to make a new situation appear. Second, we investigated whether there is a significant difference between the Perfect, which consist of "le2", and the Aspect and the Tense, which is generally learned about, and we developed a new perspective expressed as hypothesis №2. This hypothesis indicates that the Perfect consist of "le2", which has achieved a very peculiar feature of Chinese, and which gives one a quite realistic sense, through ways that enable the viewer to apprehend the situation directly and with its very flexible time shift .

Keywords: Chinese grammar, Aspect, le2